

ダケド、ホクラハ フジケイイ  
On with the show>>>

# 第36回

# 湯布院 映画祭

2011.8.24-28

会場：由布市湯布院公民館

## 【一般上映作品】

次郎長青春篇 つっぱり清水港 / 必死剣鳥刺し  
犯人に告ぐ / 傷だらけの天使 / 今度は愛妻家  
悪坊主侠客伝 Helpless  
博多っ子純情 / “経営学入門”より ネオン太平記  
日本のいちばん長い日 / 十兵衛暗殺剣

## 【特別上映作品】

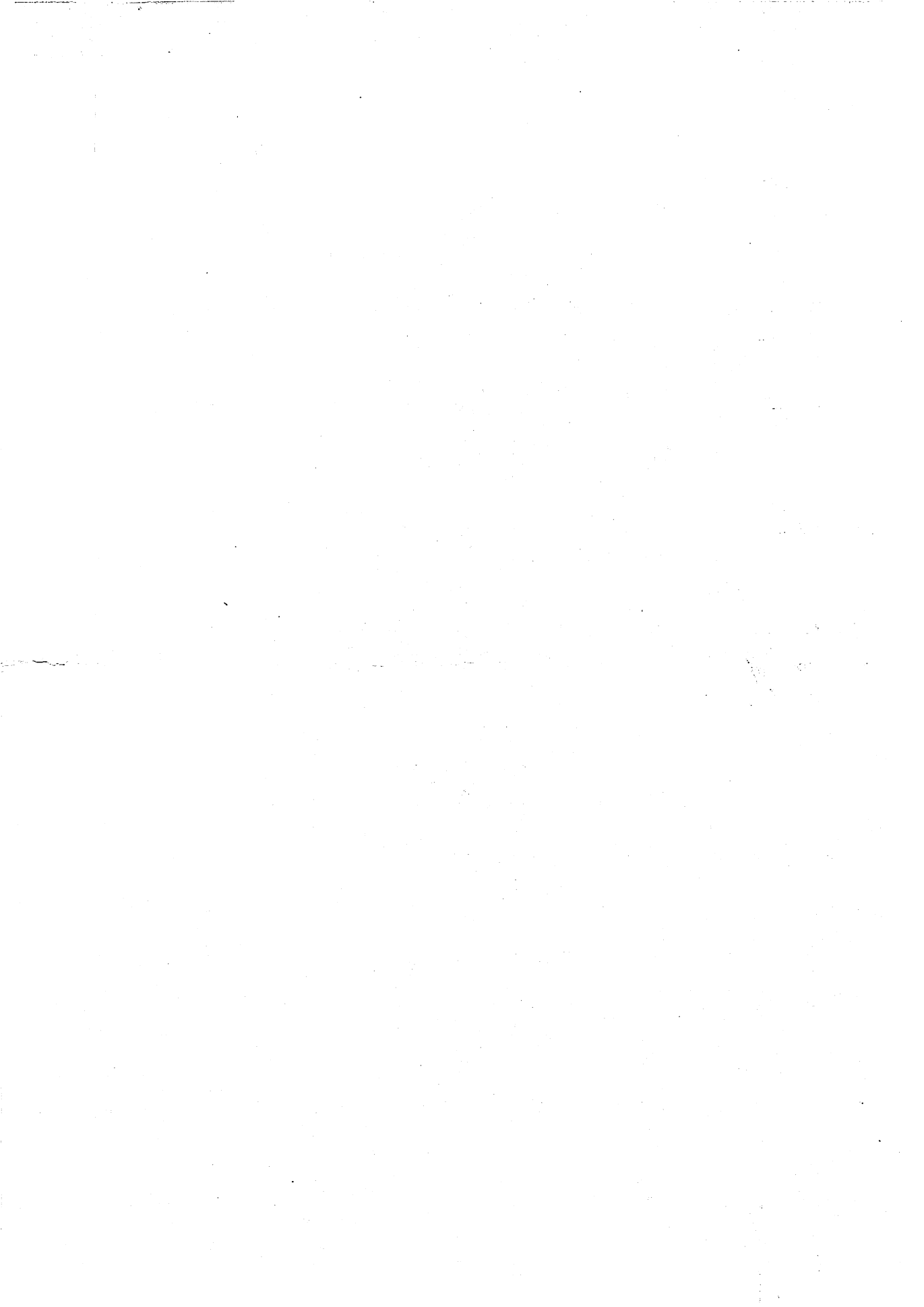
劇場版 神聖かまってちゃん ロックンロールは鳴り止まないっ / 紙風船

## 【特別試写作品】

種まく旅人～みよりの茶～ / ツレがうつになりまして。  
僕達急行 A列車で行こう



YUFUIN  
CINEMA  
FESTIVAL







# 次郎長青春篇 つっぱり清水港

1982年/カラー/ワイド/製作・配給 松竹/91分



24日(水) 20:00~21:31

清水次郎長親分の物語は戦前戦後を通じ今日まで小説、映画、TVなどあらゆるメディアで語り継がれてきた。食べ物にたとえるなら幕の内弁当といった具合だろうか、日本人にとって時代劇の定番なのである。

次郎長の青春時代を描いた前田陽一監督の本作は82年12月『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎』の併映作品として公開された。この時期は『E.T.』『ランボー』『愛と青春の旅立ち』『地中海殺人事件』などの話題作が一挙公開され映画界は大賑わいだっただけ。

おはなしの内容は博打好きの青年次郎長がフィアンセのおみつをカタに賭けて負けてしまう。やくざに連れていかれるおみつを安然として見送る次郎長。そんな時、幼なじみの小政と出会い、銀蔵と久兵衛親分の出入りに首を突っ込むが、これがインチキだと知り、銀蔵親分の賭場を荒らし、まんまと大金を手に入れる。ヤクザ稼業はおいしいもんだと仲間になった鬼吉や大五郎らとともに清水次郎長一家を名乗った。ひよんなことから落ち目の萬七親分のところにワラジをぬぐことになった次郎長一家は萬七が銀蔵一家と縄張り争いをしていくことを知り萬七の代わりに

銀蔵の挑戦を受けることになった。数人の手下を連れた銀蔵とわずか七人の次郎長一家の激戦は次郎長一家が奇跡的に勝利を治める。この時次郎長は人はみな一人では生きてゆけないものだという事を知り、ふれあいを感じながら七人の仲間と共に清水次郎長一家の絆と団結を深めるのだった。

前田監督はオープニングからエンディングまで痛快なコメディタッチの演出を貫き、過去の作品群にこだわることなく、全編パワフルな前田ワールドを展開する。次郎長親分の中村雅俊をはじめ、鬼吉に佐藤浩市、小政に明石家さんま、石松に島田紳助など史上最強の清水一家の誕生である。他にも平田満、三木のり平、大谷直子等この紙面に書ききれないくらい豪華なキャストイングだ。また今年4月に亡くなった田中好子の可憐な娘姿が画面に華を添えているのも見逃せない。残念ながらシリーズ化されずにこれ一本しか製作されなかった。次郎長親分を好演した中村雅俊は06年TV時代劇『次郎長背負い富士』(原作 山本一力、脚本 ジェームス三木)で再び次郎長親分を演じた。

解説 岩崎和明

## スタッフ

製作	名島 徹正
脚本	佐藤 陽一
監督	前田 陽一
監修	前田 陽一
撮影	佐久間 文彦
美術	重田 重盛
録音	小林 英夫
編集	太田 和夫
音楽	田辺 幸一
調音	小尾 政男
監督	梶浦 正
助手	金田
スチール	

## キャスト

清水次郎長	中村 雅俊
おみつ	大谷 直子
志乃	田中 好子
桶屋の鬼吉	佐藤 浩市
森の石松	島田 紳助
小政	明石家さんま
大政	原田 大二郎
直吉	松本 竜介
法印の大五郎	平田 満
佐藤数馬	柄本 明
島田の萬七	三木のり平
矢野左衛門	加藤 武
清水の銀蔵	北村 和夫
吉原の久兵衛	ケニー 高峰
権次	阿藤 海





### ◇B級映画にまなざしを

脚本 南部英夫

ダゲドボクラハクジケナイが映画祭の主題で、前夜祭に『つっぱり清水港』をやると聞いて、なかなかうがったセレクトだと思った。

なにしろこの映画は出だしから、発熱で苦しむ母親の頭を冷やすために、次郎長が富士山の万年雪を米俵に詰めて清水のわが家へつつ走るといふ、なんとも人を食ったエピソードで始まり、クジケル・クジケナイとはおよそ無縁な元氣印の若者たちの群像劇だからだ。

一弟子の立場でいえば、前田さんはその名前、陽一にふさわしく、どこまでも向日性の監督だった。日本人の好きなジメジメ・インインメツメツを作品から排除することにかけては徹底していた。だから観客がエリを正して観るようなマジメ映画は、絶対に作るうとなかった。

もう三十年も前だから共同脚本を担当したといっても、忘れてしまつたことが多いが、前田さんがなにがなんでも田中好子を出すんだとイキまいたこと、宿で脚本を書く時、BGMがわりに広沢虎造の浪曲「清水次郎長伝」を流したことが思い出される。

不思議なことに、それまで浪花節なんか聞いたこともないのに、駿河路やあー花たちばなに茶の香りーなんてのが耳に入ってくる、次郎長の乾分の、さしずめ大政あたりになつたような錯覚におち入り、気分が昂揚してくるのだ。師匠は、人をふるい立たせる術を心得ていたようだ。

スーちゃんの起用は、キャンディーズのファンだったせいだ。酔っぱらうとよく「春一番」をアカペラで独唱した。それは歌というより怒鳴りに近かったが、カラオケで小器用にやつたのでは、込めた気持が伝わらないと思つたのかもしれない。映画の作り方

も、この流儀を押し通した。

その数年前に漱石の「坊ちゃん」を中村雅俊で映画にして成功していたから、会社の方からも一度雅俊でなにかをとという依頼があつて、(ご存知もの)が好きな前田さんが、だつたら次郎長をやりたいと応じたようだ。

ただ(ご存知もの)だからといって、世間でよく知られた話のスタジオは決して使わなかつた。人物像や設定は借りても、必ず自分の気がいくストーリーに作り直した。『坊ちゃん』だつて原作にはない学生同志の大ゲンカがクライマックスになつてゐる。

さて、ひところ、B級映画という言葉がもてはやされたことがある。昨今はあまり聞かないから死語になつてしまつたのだろうか。もともとは映画会社が撮影所で作り、その系列の映画館にかけたプログラムピクチャアの中で、たとえ企画は会社のものであつても、出来上りに監督の個性が色濃く目

立つアクが強い娯楽映画の総称である。

別ないい方をすれば、A級映画とは呼ばれなかつたが、お金をかけた内容空疎な大作やとりすました芸術映画、エセ人道映画に対して意識的に自ら背をむけた、いはばアウトロー映画への、勲章といつていいだろう。

前田作品のほとんどが、この勲章に値すると判断しても間違いないだろう。65歳で他界したのは13年前だし、活躍したのが昭和期だつたから、今ではその名前を知る人は少ないかもしれない。だが、反マジメ精神とブラックユーモアを旗印にして、「オレは間違つても文芸大作だけは撮らない」と公言、松竹の中で異端扱いされた前田さんと似たような戦いを強いられ、B級映画を作つた先人監督が他の場所にもいることだろう。若い映画好きな人たちには、ぜひそうした作品に目をむけてほしいと思う。



なお、次郎長を観て、いいところあるよと思えた人は、ちよつぱり手をひろげて、『にっぽんばらだいす』『あゝ軍歌』『神様のくれた赤ん坊』など他の前田作品にもふれてみてください。

## あのころに戻りたい

撮影 長沼六男

うーん、そんなのもやったなあ…、それ位昔の仕事となりました。

丁度この頃、相米さんが『魚影の群れ』のキャスティング中で、佐藤浩一さん(当時まだ新人)を見たいと『つつぱり清水港』の参考

試写をしたらしい。

その時「カメラは、こいつが、元気でいい」と、(きつとあの独特のグジュグジュとした口調でうつむき加減に言ったと思う)後で、故人になられてから知りました。

という訳で、めでたく、浩一君も僕も幸運をつかみました。

『魚影』は僕にとって飛躍の作品で…

『つつぱり』はそれに至る大事な作品という事になる。

当時すでに大忙しの、さんまさんや島田紳助さんをはじめお笑い系タレントが勢揃い、勢いのある

この人達の出演で、それに僕の若さも手伝って確かに元気のいい映画になりました。

それに、スーちゃん、ふつくらと初々しく、品があつて…、スーちゃんが現場に来る日が楽しみでした。

因みに、前田さんのカラオケの十八番はキャンディーズ、スーちゃんには甘い前田さんの姿が目にかびます。

湯布院といえば…

前田さんの二つ前の作品『神様のくれた赤ん坊』での別府湯布院阿蘇への車の走りの実景は、

それにラストの空撮、まだチーフであつた僕の撮影です。

別府での宿泊は温泉旅館、湯布院では雪に見舞われ、ここでも当然温泉宿、雪を見ながら露天風呂に入りました。

楽しい事ばかりではありません、空撮では、出だしの人物を出来る限り大きく、そして後半は橋と光る海をいいバランスにと、揺れるヘリの中で悪戦苦闘しました。

『つつぱり』を挟んだ前田さんとの仕事…、ああ、あのころに戻りたいなあ…。



## 必死剣鳥刺し

### 役者の中の役者

製作・脚本 伊藤秀裕

今回の作品で一番大変だったのは、十数ページの短編を100分程度の映画に仕上げるということに尽きます。原作者サイドからは、

あくまでも原作に忠実にという要請がありました。原作に忠実にそのまま脚本にすると、どうもがいても30分程度の短編にしかならないのです。原作の一行一行の行間にあるものを必死に読みとろうとしました。

例えば城中への行き帰りに、彼

は何を考え、どういう風景の中を歩くのか。彼が殿の愛人を刺殺したことを、どう自分の中で位置づけてゆくのか。彼は自分のしたことに揺るぎのない信念を抱き、貫いたのか、本当は心の奥底で動揺や混乱は生じなかつたのか。そういった心理的な葛藤を画にするに

はどうすればいいのか。何せ、あの短編の中で彼の語っている言葉は文字数にして、四百字詰め一枚か一枚半ぐらいです。読むだけなら五分もかかりません。自分に自分を語る言葉を持たない場合は、仕様がありません。彼以外の人間に彼を語らせるしかないのです。

